

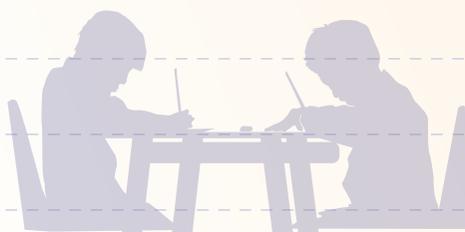


特集

「統一合判」 中学入試レポート vol. 3

“私学の校風”を感じてみよう。 わが子にあった タイプの私学を探すために。

5年生の「統一合判」模試は今回で3回目。大勢の仲間が集まって力を競う、こうしたテストの雰囲気や形式に、ようやく慣れてきた受験生も多いと思う。これから再来年2月の入試までに、保護者の皆さんは、学校見学をしながら、わが子の受験校を考えていくことになる。そこでベストの受験校を選んでいくうえでのヒントをお伝えするために、今回は「私学の校風”を感じてみよう。～わが子に合ったタイプの私学を探すために～」というタイトルで、それぞれの私立中高一貫校の校風やカラーの違いをご紹介します。



首都圏模試センター

私学のユニークな校風を選ぶ

中学受験の学校選択

中学受験の学校選びにあたって、親子で意識すべき最大のポイントは「わが子にあった学校かどうか」という点である。

では、「わが子にあった学校」とはどのようなものか。それにはいくつかの観点があるが、最も大切なのは、それぞれの学校の「校風」や「カラー」といわれるものだろう。

以前に取材でお話を伺った、あるミッション系の女子校の校長先生は、「校風とは、まさに風のようなもの。たとえば校内をしばらく歩いてみると、肌で感じられるような雰囲気です。在校生の様子や表情からも感じられるものだと思います」と話してくれた。

私学にとって「校風」や「カラー」は、創立者による「建学の理念（＝教育理念）」と同じように、教職員や生徒、保護者、卒業生（OBやOG）など、学園に関係するすべての人によって、長い年月をかけて守り育てられてきたもの。それは公立学校にも存在はするが、約10年のスパンで教員が転勤を余儀なくされる公立中高とは違って、歴史の古い私学では130年以上も連続と受け継がれ、熟成されてきたものでもある。

それが各私学の「校訓」や「校是」に反映されている場合もあれば、その「校訓」や「校是」によって、各私学の「校風」や「カラー」が生み育てられたという見方もできるだろう。

たとえば、全国トップレベルの進学校として知られる兵庫県の灘中高の校訓は、創立者の一人であった嘉納治五郎（柔道の講道館の創始者。日本人で初めてのIOC委員でもあったという）による「精力善用 自他共栄」という言葉。ちょっと変わった校訓であるが、これは現在も講道館に受け継がれている言葉でもある。後に灘中高の第5代校長を務めた故・勝山正躬先生は、この校訓の「精力善用」を「生徒は運動しているか勉強しているか寝ているか、それだけでいい」と、ユーモラスに意識してくれたことがあった。「自他共栄」は、まさに現代に求められる「共生」



すでに創立時から、「グローバル化をめざす」「三理想」を掲げ、「自調自考」の姿勢を育ててきた武蔵

の意味だろう。これが現在も灘中高に受け継がれている精神を象徴する言葉で、非常に自由な校風のもとでも、やるべきときには学業に集中することができる、灘中高の生徒の気質や姿勢を育ててきたともいえるだろう。

大正時代に日本に10数校だけ設立された、当時の超エリート校である旧制七年制高等学校を前身とする武蔵中高の建学の精神（三理想）のひとつは「自調自考」。「自ら調べ自ら考える」という意味の言葉だ（現在では同じ言葉を、渋谷教育学園幕張中高と渋谷教育学園渋谷中高でも教育理念としている）。麻布と並び「自由な私学」の代表といわれる武蔵中高の自由かつアカデミックな校風が、この「自調自考」の精神によって育てられてきた部分は大きいはずだ。

また、多くのミッション・スクール（カトリック・プロテスタントともに）で掲げられてきた「Men for Others (with Others) = 他者のために（他者と共に）生きる」というスローガンも、「他人を思いやり、奉仕の気持ちを大切に生きて生きる」という意味で、この言葉がキリスト教系の私学の校風や教育姿勢の形成に果たした役割は大きいだろう。

同じように、仏教系の私学にも「他者への思いやり」や「人間の尊厳」、「いのち」の大切さを教える学校が多く、共通して穏やかな校風、温かな雰囲気を持つ学校が多い。これも、公立学校と違って宗教色を持つことのできる私学の特色のひとつといえるだろう。



私立中高一貫校のルーツでもある 男子校・女子校の存在

また私立中高一貫校には、男子校・女子校・共学校という、設置形態の違いがある。全国の公立中学校や、大半の公立高校が共学校となっている現代では、男子校・女子校はすでに“少数派”であり、私学の特徴のひとつにもなっている。

男子校には、もともとの（旧制中学校の時代からの）伝統からか、学業に向かう姿勢は厳しさを持つ反面、バンカラともいえるだらかさや、とても自由な校風を持つ私学が多かった。現代ではすでに「バンカラ」という言葉は死語になったのかもしれないが、だらかな校風はいまも多くの男子校で変わることはない。

女子校の多くは、明治の初期までは女子に与えられなかった「学問の場」を設けるために創立された。家政や裁縫系の学校としてスタートした女子校も多かったが、時代を経るうちに、それらの私学も、やがて高等教育（大学）へと進学する学校へと変わっていった。

そうした女子校には、躰や日本文化も大切にする学校が多かったこともあり、女子だけが学ぶ環境が大切にされ、独自の文化や「女子校らしさ」が生み育てられ、やがてそれが各校の校風になっていったといえるだろう。

こうした設置形態の違いと、それぞれの特色や魅力を知り、わが子に合った（保護者がわが子に望む）タイプの学校を選ぶことも、志望校

を選ぶうえでの大切なポイントだ。

いまの中学受験生（小学生）の保護者の皆さんは、ご自身が私立の男子校、女子校のご出身の方を除けば、「共学が当たり前」の時代と環境のなかで育ってきた世代だろう。

しかし、もともと、明治～大正時代に創立された多くの私学は、男子だけの学校、女子だけの学校としてスタートした経緯を持つ。男女共学（共修）が一般的になる前の時代、たとえば創立から百年以上の歴史を持つ私学は、ほとんどが男子校、女子校という形態で、長い伝統を形作ってきた。古くは旧制の高等学校、高等女学校を見ても、公私ともにすべて男子校、女子校だった。

早くから大学進学でも高い実績をあげてきた開成、麻布、武蔵、女子学院、フェリス女学院、雙葉、桜蔭、横浜共立学園などが、いずれも男子校、女子校であるのは、そうした経緯によるといってもいい。つまり、これまでに高い成果をあげてきた私学の「中高6年間一貫教育」のルーツは、男子校・女子校にあるという見方もできるわけだ。

しかし、戦後の新たな学制と民主主義教育が導入された際に、公立中学校はすべて共学となり、公立高校も（北関東から東北エリアの一部の県立校を除いて）ほとんどが共学校として再スタートした。

そして、男女共学が自然な形として世の中に浸透していくなかで、私学にも共学校が生まれ、あるいは男子校、女子校から共学化する私学も年々増えてきた。とくに1970年代後半（昭和50年代なかば）以降に新設・再開された私立中学校の多くは、共学校としてスタートした。あるいは開校後に共学化に踏み切り、現在に至っている。

ちなみに、1978（昭和53）年から2013（平成25）年にかけての35年の間に、計115校の私学が中学を新設・再開しているが、そのうち70校は共学校である。そして同じ期間に男子校、女子校から共学化した私学は55校もある。現在

現在は教育理念に「フェアな精神」「思いやり」「心」「民主主義を守る意思」の四つを確に意思を伝える能力」の四つを確に、新たな時代に求められる力を育てる教育を実践する海城。



キリスト教精神を基盤にした「慈愛（あい）と誠実（まこと）と創造」を校訓に謳い、心の教育を大切にしている鷗友学園女子。



では先の伝統校と競い合うほどの高い進学実績をあげようになった渋谷教育学園幕張、同渋谷などの共学校は、いずれもこの時期に誕生した、いわば“ニューウェーブ”の私学だ。

私立中高一貫校の大きな分類 大学付属校と進学校

もうひとつ、私立中高一貫校の設置形態の違いとしては、系列の大学や短期大学を持つ大学付属校と、系列大学を持たない中高のみの進学校という分類ができる。

大学付属校の場合は、その比率の違いこそあれ、中高を卒業した生徒は、系列の大学や短大に推薦で進学することができる。

慶應義塾大学の付属校である慶應義塾高校（日吉）や、慶應志木高校、慶應女子高校、慶應湘南藤沢高校の卒業生は、ほぼ全員が推薦で慶應義塾大学に進学することができる。早稲田大学の付属（系属）校である早稲田高等学院や早稲田実業高等部の卒業生は、やはりほぼ全員が推薦で早稲田大学に進学することができる。

ほかにも明治大学、中央大学、立教大学、法政大学、青山学院大学、日本女子大学などの付属高校の卒業生も、80%以上が推薦で系列の大学に進学することが可能だ。

その一方で、男子校の開成や麻布、海城、浅野、本郷、巣鴨、城北、攻玉社、逗子開成、女子校の桜蔭、女子学院、雙葉、豊島岡女子学園、鷗友学園女子、吉祥女子などのように、系列の大学を持たない中高のみの進学校の場合は、各自

が希望する大学に進学するために、自力で大学受験をクリアして合格し、入学資格を得なければならない。

そのため、自ずと大学付属校と進学校の間には、大学受験・進学に向けての意識やスタンスに違いが生じる。

中学に入学した時点で、6年後の大学進学がある程度保証されている大学付属校では、大学受験のための準備をさほど意識することなく、好きな教科の学習や部活動、自主研究などに思い切り打ち込むことができる。

一方、中学に入学した時点から、6年後の大学受験も意識して、そこまでに確かな学力を身につけ、受験への対応力も育てていく必要のある進学校では、そうした将来に向けての進路希望を実現するために、しっかりと意識を持って日々の学習を積み重ねていかないとならない。

中高6年間の継続した「高校受験のない」環境を生かして、好きな部活動にも打ち込むことができるとはいえ、大学付属校と比べると、少し早めの段階で気持ちを切り替えて、大学受験に向かう準備をスタートさせないといけない面があるといえるだろう。

こうしたタイプの違いは、どちらが良いとか悪いとか、優劣を比較すべきものではなく、それぞれの受験生と保護者が、わが子の進学先としてどちらのタイプの学校を好むのか、その価値観や希望によって選択されるべきものだ。

たとえば、将来わが子を進学させたい（と願う）大学が国公立大学であるならば、6年後の大学受験をクリアするための力を育ててくれる進学校を選ぶ必要があるし、慶應や早稲田などの有名大学に進学させたいならば、そうした大学の付属・系列の中高を選ぶか、あるいはそうした大学に一般受験で合格できる可能性の高い（合格実績を持つ）進学校を選ぶという、二つの選択肢から選ぶことになる。

ただひとつ注意したいことは、先にあげた慶應や早稲田など、卒業生のほとんどが推薦で大学に進学するタイプの付属校の場合には、中学



わが子にとってベストの 受験校選択をするポイントは？

～ 10月以降、盛んに行われる「説明会」や「学校行事」の機会に確かめよう～

わが子の受験校を選ぶにあたっては、何より家庭の考え方、保護者の期待、本人の将来への希望、本人の性格・タイプなどを最重視して、最も適した私学を選んでほしいと思う。学校説明会や見学の機会に、ぜひ保護者の希望と考え合わせて確かめてほしいのが次のような点。ここでは12のポイントを挙げてみた。

- ① 教育理念や目標、そこで身につけられる力が、おさまが社会に巣立つ21世紀の新しい社会に求められるものか？
- ② 校風（カラー）が本人の性格に合っているか？
- ③ 男子校、共学校、女子校のタイプは、家庭の希望と合っているか？
- ④ 宗教色のある私学の場合、その背景（理念）に理解と賛同姿勢をもてるかどうか？
- ⑤ 進学校か付属校か、あるいは半進学校（半付属校）か？
- ⑥ 自由な学校か、規律正しい学校か？
- ⑦ 学習指導のスタンスや体制は、家庭の希望に合っているか？
- ⑧ 大学進学状況は納得いくものかどうか？
また、将来性についてはどうか？
- ⑨ クラブや学校生活はのびのびできるか？
- ⑩ わが子が学校に楽しく通えて、友人関係や雰囲気に関わり込めるかどうか？
- ⑪ 通学には無理がないか？
- ⑫ その学校が、危機管理の面も含めて「安心して通わせられる」場所かどうか？



「開物成務」（校名の由来、「ペンは剣よりも強し」校章に図案化された格言）を校風を象徴する言葉として謳っている開成。

さらに、ここ数年の入試では、公立学校で進められている“教育の自由化”政策に対して、各私学がどのような（オリジナルの）姿勢を打ち出しているかが、保護者のニーズと照らし合わせたときの大きな焦点となってくる。

中高6年間の学習指導のノウハウや成果で、私学が公立中高をリードしていることは、すでに多くの保護者に認められている。そのうえで、私学ならではの教育のもとで、21世紀を担う子どもたちが「より良く生きる」力を身につけるために、どのような“プラスアルファ”を与えてくれるのかに期待がかかっている。

こうした点をトータルに見たときに、わが子の受験校として納得できるかどうか、親子の意思決定の大きなポイントになってくるのだ。

に入学した時点で、将来の進学先となる大学が、ほとんど決まって（将来の進路の選択肢が限られて）しまうということだ。それらの付属校から、国公立大学や他の私立大学を受験して進学する生徒もいることはいるが、それは少数派だ。

こうした大学が付属校を設けている理由のひとつは、中高生の時代から同窓の校風やカラーに馴染み、家族ぐるみで教育理念を理解してファンになってくれた生徒に、系列の大学に進学してから、さまざまな面で大学の中核となって

活躍してほしいという期待によるものだ。それは学問・研究でもスポーツでも自治活動でもかまわない。

だからこそ、そうした大学付属校には、系列大学の持つ雰囲気と共通する校風やカラーがある。それぞれの付属中高に「慶應らしさ」や「早稲田らしさ」があり、また各付属中高もそうしたカラーを大事にしている。慶應・早稲田の付属校の生徒が、中学生のときから大学野球の早慶戦の応援に参加し、大学生や高校生と一緒に、慶應義塾大学の応援歌「若き血」や、早稲田大学の応援歌「紺碧の空」を歌うのもそのためだ。

もっとも、最近では大学付属校の大半が、系列大学に推薦で進学するだけでなく、他の国公立大学を自力で受験して合格をめざす道も選択できる「半進学校」化していることも知っておく必要がある。

たとえば、早稲田大学の系属校のひとつである早稲田中高は、姉妹校の早稲田高等学院や早稲田実業とは進路の比率がかなり違う、いわば「半進学校」だ。1学年約300名の卒業生の半数にあたる150名前後が早稲田大学に推薦で進学し、そのほかの生徒が自力で東大をはじめとした国公立大学や、慶應などの私立大学、早稲田大学の一般試験に合格し、各自の希望する進路に幅広く進学している。

こうした「半進学校」色は、先にあげた「卒業生の80%以上が系列大学に推薦で進学する」有名大学の付属校以外の、ほとんどの大学付属校（とくに女子大の付属校）が現在は持っていると考えてよいだろう。

こうした「大学付属校の半進学校化」は、早い段階で系列大学だけに進路が限られることなく、生徒の意思と努力しだいで他の難関大学にも進路が開ける、そうした将来の「選択肢の幅広さ」を（中学受験生と保護者のニーズにも応えるために）実現してきたものといえるだろう。

先にあげた有名大学の付属校でも、明治大学や法政大学の付属校では、「国公立大学を受験す

る場合には、系列大学への推薦権を保持したまま他大学受験ができる」といった優遇制度が取り入れられている。

また、ここ十数年の女子の進路希望として女子大学（短期大学）の人気離れが進み、「都心の共学の4年制総合大学」に人気が集中してきたこともあって、女子大付属校の「半進学校化」が急速に進んだ。学習院女子、大妻、共立女子、実践女子学園、跡見学園など、かつて人気の高かった女子大学の付属中高は、いまでは軒並み「半進学校化」したといっていい。山脇学園に到っては「半進学校化」どころか短期大学を廃止し、その教育リソース（施設）を中高一貫教育に集中させたほどだ。

ただし、それでも、これらの伝統ある女子大付属校の校風やカラーは色濃く残っている。いまでも変わらず「ごきげんよう」という伝統の挨拶を続けている、学習院女子、大妻、跡見学園、白百合学園などの校風とカラーは、それらの学校の同窓生やファンからは変わらぬ魅力として大事にされているのだ。

“自由派”私学と、“生真面目派”私学

次に、自由な校風（校則）の私学と、やや堅めともいえる、生真面目な校風（校則）の私学について見ていこう。

冒頭では、私立中高一貫校のなかでも自由な校風で知られる灘や麻布、武蔵について触れた。



「九転十起」「愛と和」という校訓と、「各駅停車の教育」というフレーズを掲げ、多感な中高6年間で様々な体験をして成長してほしいと願う浅野。



特集 “私学の校風”を感じてみよう。わが子に合ったタイプの私学を探すために。

これらの男子進学校には、決められた制服もなく（正確には麻布には式典などで着用する黒の詰襟の学生服が標準服として定められている）、校則も数えるほどしか明文化されていない。

毎年の麻布の説明会では、「一見すると『放任や放縦』とも受け止められがちな面も認めたくて、あえて『麻布の自由』を大切にしている」という意味のことが語られる。中学の入学段階から、まだ若干12歳の少年である生徒を一人の大人（紳士）として扱い、学校生活のあらゆる場面で、自主的な判断力や行動力を身につけさせたいと願う、同校の伝統的な教育姿勢がここに現れている。

私立中高一貫校の校風やカラーを肌で感じるには、文化祭や体育祭など、在校生が素のまままで自ら楽しみ、躍動する姿が見られる学校行事を見学するとよいと、私たちも毎年の受験生と保護者にお勧めしている。

しかし、毎年4～6月中旬に3日間開催される麻布の文化祭に行ってみた保護者のなかには、予備知識がないと、生徒の髪の色や行動など（一般的な中高生と比べると）、あまりの自由奔放な雰囲気には驚かれる方も多い。だがそれが麻布という私学を象徴する姿なのだ。

女子学院や恵泉女学園、青山学院、明治学院など、プロテスタント系のミッション・スクールにも比較的、自由な校風の私学が多い。こちらでも「自主自律」を大切にしている学校が多く、「あなた方には聖書があるのだから、それをもとに判断しなさい」という考え方だ。

しかし、同じミッション・スクールでも、カトリック系の学校の多く（とくに女子校）には、原則として「なるべく生徒を危険に触れさせない」という、いわば「予防教育」的なスタンスの学校（雙葉や白百合学園、光塩女子学院など）が多く、生徒の側からすると「校則が細かくてやや厳しい」と感じる面もあるようだ。これも「生徒の安全」を重視した学校側の配慮によるものだが、こうした校則の違いが、各私学の校風に反映している面もあるので、その点は意識して

おくとよいだろう。実際に入学してみれば、どちらも「楽しく学校生活を過ごせる」ことに違いはないのだが、それぞれの受験生の希望や家庭の教育方針と大きく違っていると、それが「ミスマッチ」と感じられることもあるので注意したい。

それぞれの雰囲気を知るには、 まず一度、自分で足を運んでみる

そして、こうした男子校・女子校・共学校の雰囲気の違いを知るためには、やはり各私学に足を運んでみるのが大切だ。在校生がどのような表情で過ごしているかを自分の目で見ることで、お子さんにも、きっと自分なりの好みや希望が出てくることと思う。

そして、そういう入学前のリサーチをしようとして学校を選んだ場合でも、男子校や女子校に進学した中学生に入学前と入学後のイメージギャップを尋ねると、男子校では「もっと騒がしくて大雑把かと思っていたが、意外と落ち着いていて、優しい先輩や先生が多かった」といった感想が、女子校では「もっとお嬢様学校っぽい雰囲気かと思っていたが、みんな明るくてうるさいくらい元気だった」といった意味の感想が多く聞かれる。

つまり、それだけ大らかで、先生や先輩に温かく見守ってもらえて、友人たちと和やかに過ごせる環境や風土が、多くの私立中高一貫校にはあるということだろう。



「勤勉・温雅・聡明であれ」、「責任を重んじ礼儀を厚くし、良き社会人であれ」を校訓として、謙虚な心で日々の学びに向かう校風

私立中高一貫校の「校訓・校是・キャッチフレーズ」〈一部抜粋〉

ここでは、各私学の「校風」にも反映することの多い、「校訓・校是」や、最近謳われているスローガン（キャッチフレーズ）をいくつか抜粋してご紹介しておきたい。

こうした言葉の意味することも意識して、文化祭や体育祭など学校見学の機会に在校生や先生方の様子を見てみると、各校の雰囲気や、さらによく理解できるだろう。

【男子校】

●浅野

「九転十起」[愛と和] (校訓)

「各駅停車の教育」

●麻布

「青年即ち未来」(創立者・江原素六の言葉)

●栄光学園 (キリスト教・カトリック系)

「MAGIS (真理を求め、たえず学び続ける人間)」

「AGERE CONTRA (素直な心を持ち、人々に開かれた人間)」

「AGE QUOD AGIS (確信したことを、勇気をもって実行する人間)」

「MEN FOR OTHERS, WITH OTHERS (自分の力を喜んで人々のために生かすことのできる人間)」

「AD MAIOREM DEI GLORIAM (己の小ささを知り、大いなる存在に対して畏敬の念をもつ人間)」

「NOBLESSE OBLIGE (多くを与えられた者として、その使命を果たすことのできる人間)」

(以上、栄光の目指す理想の人間)

●慶應義塾普通部

「学び」と「人間交際」を深める

●京華

「ネバー・ダイ (決してあきらめない)」

●芝 (仏教系・浄土宗)

「共生 (ともいき) のこころ」

「遵法自治 (じゅんぽうじち) (校訓)」

●世田谷学園 (仏教系・曹洞宗)

「天上天下唯我独尊」= 「Think and Share」

「明日をみつめて、今をひたすらに」「違いを認め合って、思いやりの心を」

●本郷

「強健・厳正・勤勉」

●武蔵

「東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」

「世界に雄飛するにたえる人物」

「自ら調べ自ら考える力ある人物」

(三理想)

【女子校】

●桜蔭

「勤勉・温雅・聡明であれ」

「責任を重んじ 礼儀を厚くし 良き社会人であれ」

●大妻

「恥を知れ」

●共立女子

「誠実、勤勉、友愛」

●国府台女子学院 (仏教系・浄土真宗)

「敬虔・勤労・高雅」(三大目標)

「智慧(真理を探究する心)」と「慈悲(他者を思いやり慈しむ心)」



「MEN FOR OTHERS WITH OTHERS (自分の力を喜んで人々のために生かすことのできる人間)」をはじめ、理想の人間像を謳う栄光学園。

●白百合学園 (キリスト教・カトリック系)

「従順・勤勉・愛徳」

●千代田女学園 (仏教系・浄土真宗)

「敬知・温情・真実・健康・謙虚」

●東京純心女子 (キリスト教・カトリック系)

「マリアさまいやなことは私がよるこんで」(建学の精神を表す学園標語)

●東京女子学園

「人の中なる人となれ」(教育理念)

●豊島岡女子学園

「道義実践・勤勉努力・一能専念」

●日本女子大学附属

「信念徹底・自発創生・共同奉仕」

●雙葉 (キリスト教・カトリック系)

「徳に於いては純真に、義務に於いては堅実に」

●和洋九段女子

「先を見て齊える」(校訓)

【共学 (男女別学) 校】

●かえつ有明

「怒るな働け」

「学際的な思考・実行力の獲得」「自己実現力の獲得」「確かな学力の獲得」(教育目標)

●関東学院 (キリスト教・プロテスタント系)

「人になれ 奉仕せよ」

●国学院大学久我山

「忠君孝親・明朗剛健・研学練能」(学園三箴)

●駒込 (仏教系・天台宗)

「Light Up Your World (一隅を照らす)」(最澄の言葉)

●成蹊

「桃李不言 下自成蹊」

●東洋大学京北

「諸学の基礎は哲学にあり」

●立正大学付属立正 (仏教系・日蓮宗)

「行学 (修行と修学) 二道」

「親切・勇気・感謝」

●早稲田実業

「去華就実 (華やかなものを去り、実に就く)」

「三敬主義 (他を敬し、己を敬し、事物を敬す)」